

私は、世界の民族衣装の研究をしていて四〇年あまりの間に、一〇〇カ国以上の国々の小さな村を訪ねて来た。

地図に名前の載っていないような村に昔ながらのくらし、昔ながらの衣装がある。

それぞれの国の、お金も見て来た。それぞれの国の歴史や国王の肖像や動物など、そのイメージが表現されているが、紙幣はほとんどデザインがわからないくらい使いこまれていて、破れそうなものもある。日本の紙幣はきれいだ。

昔、戦後の日本に、連合国軍兵士と日本人女性から生まれた孤児の保護施設があった。「エリザベス・サンダースホーム」といって創設者の沢田美喜さんの献身的な努力で孤児達は育てられていた。その沢田さんの著書の中にこんなことが書いてあった。

「お札は、きれいに財布に入れてあげるとふえて来るし、乱暴に扱うとなくなつてゆく。自分は一枚一枚ていねいに揃えて入れている」

自費で、子供達のめんどうを見ている美喜さんにとって一枚一枚のお札が、孤児達の生命につながっていたのだ。



絵・江口修平

財布の中味

市田ひろみ

沢田さんの生き方に感動して、財布のお札をていねいに入れるように気を使った。すると、紙幣の使い方もわかりやすく両替のタイミングもわかり良い。

ところで、ブランドのバッグや財布は、今なお、男女ともに人気がある。

しかし使い方となると、どうだろうか。クレジットカード、駐車券、診察券、レシート、ポイントカードなど…もはや、一枚のレシートも入らない、満腹状態だ。

その中に何枚かのお札が見える。スーパールのレジで順番を並んでいると後の客の財布から割引カードをさがしているのにつきあわされるのだ。

財布を見れば、その人の生活が見える。きつとあの人の部屋はちらかっているのだからなどと人のことを言っていたら…

なんと、今朝、久しぶりに引っぱり出した本のケースをあけたら、白い封筒がぼとりと落ちた。ドキッとして中を見たら、一〇〇ドル札一〇枚。計千ドルの新札が出てきた。自分で入れたことを、なんと一〇年以上も忘れていたのだ。

何だか、もうかつた気がする。



いちだ・ひろみ●大阪府生まれ。服飾評論家・エッセイスト。京都府立大学女子短期大学部国文科卒業。美容師・女優を経て和装教育者、世界の民族衣装のコレクター。テレビ・雑誌、講演などで、日本の文化、着付けなどを指導。また、世界106都市で、日本文化の紹介、きものショー、十二単衣ショーなどを構成出演。テレビ朝日「京都迷宮案内」では女将役として出演。緑茶やおにぎりのCMにも出演。主な著書に「衣裳の工芸」、「私という生き方」など。